

転生チートライフを

# 辺境伯家次男

# 楽しみたい

HENKYOUHAKUKE  
JINAN HA TENSEI CHEAT LIFE  
WO TANOSHIMITAI

4  
vol.

著 ベルピー

■ Akaike

主な登場人物

リース

クリフの相棒で、もふもふのフェネック。



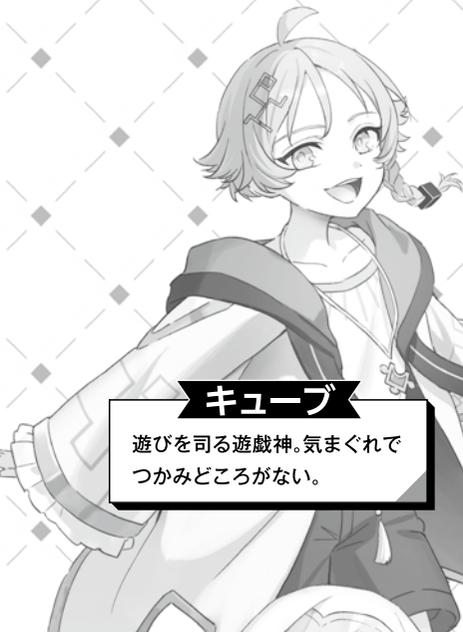
グラン

クリフが召喚した、人化できる最強スライム。



キューブ

遊びを司る遊戯神。気まぐれでつかみどころがない。



パイン

元勇者。クリフとの対決の末、消滅したはずだったが……？



ユーナ

回復魔法が得意な聖国の聖女。誰に対しても優しい。



ナリア・テキサス

帝国の第一皇女で、槍使い。いつも明るくふるまう。



セリーヌ・サリマン

サリマン王国の第二王女で、クリフの婚約者。



クリフ・ボールド

本作の主人公。仕事帰りにトラックにひかれ、異世界に転生。辺境伯家の次男として生まれると、理想の異世界生活を叶えるため全力投球する。



## 第6章 聖国へ 聖女を助けよ

### 第67話 イマデア枢機卿すうきぎょうから語られる聖国の闇

フロッグ亭でイマデア枢機卿と無事に会った後、お互いの自己紹介などを含めた雑談を少しだけ行い、本題に入った。

「それでイマデア枢機卿、ユーナは？ いや、聖国は今どういった状況なのでしょうか？」

「ああ、そうだね。順を追って話をしていこう。あれはユーナが帝国から戻ってきた時からかな。

マリオ教皇の具合が悪くなり、人前に出ることができなくなったんだ」

イマデア枢機卿は聖国で起こったことを話し始めた。

「元々聖国はマリオ教皇がトップにいて、その下に聖女ユーナがいた。そして、教皇と聖女をサポートする実務部隊として私を含めた四人の枢機卿がいたんだ。新教皇となったグローヌ枢機卿に、ゼイロン枢機卿、アマリ枢機卿、そして私だ。教皇は代々枢機卿の中から選ばれる。そして枢機卿

は大勢の司教、大司教による推薦と投票で決まるんだ」

イマデア枢機卿は聖国の体制について説明を続ける。

「マリオ教皇とユーナ、私の三人は、聖国が周りを支配するのではなく、全世界が対等に協力し合える世界を目指して活動していた。対して残りの枢機卿は、全世界に教会を置く聖国は他の国よりも上であるべきだ、という思想で行動している。そういうわけでこの聖国には、教皇派と反教皇派の二つの勢力があったんだ。今まではバランスが取れていたが、マリオ教皇の具合が悪くなったことがきっかけで、そのバランスが崩れてしまったね」

「反教皇派の勢いが強くなったんですか？」

「ああ。ユーナはマリオ教皇の身のお世話をしている、なかなか動けなかった。さすがに私一人では対抗できなかつたよ」

「なるほど」

「だけど、ユーナの看病もあり、マリオ教皇は回復に向かっていた。しかし急に体調が悪くなって、そのまま亡くなってしまったんだ」

「それって……反教皇派の仕業ですか？」

「私はそう思っている。そして、ユーナとともにマリオ教皇の死について調べていた。だが……」

「証拠は見つからなかつたんですか？」

「ああ。そればかりか、ユーナが大聖堂から出てこなくなった……きっと何か弱みを握られて、監

禁されているに違いない。多分アスカを人質に取られているんだろう。あれからアスカの姿も見えないし」

「アスカ？」

「ああ。ユーナと仲のいい友達兼お世話役だよ」

「ああ、ユーナといつも一緒にいた子か」

「もしかしたら、ユーナはマリオ教皇の死の真相を知ったのかもしれない。だからグローヌに捕まっているのかも。さすがにマリオ教皇が亡くなってユーナまで死ねば、聖国はガタガタだ。いくらグローヌが教皇になったからといって、ユーナを殺すことはできないと思う。だけど、何かあるかわからない。色々と行動しているが、なかなか助け出せなくてね……」

なるほど。大まかに状況はつかめたな。多分、イマデア枢機卿の言うようにユーナは何か知っている。だから監禁されているんだ。殺されていないのは、聖女という肩書に利用価値があるから。なら利用価値がなくなったらユーナは殺される。さてどうしたものか……

「イマデア枢機卿。大聖堂に忍び込んでユーナを助けることはできると思います。ですが、ユーナを助けた後の行動が決まっていなくて、意味がありません。その辺は何か考えていますか？」

「そこまではまだ決まっていない。ユーナが教皇の死とグローヌとのつながりの証拠を持ってれば、それを使ってグローヌを失脚させることができると思うが……」

そこがポイントだよな。ユーナを助けても証拠がなかつたら、グローヌを追い詰めることはでき

ない。

「だが、我々には時間がない」

「どういうことですか？」

「教皇が代われば、新たに枢機卿を選ぶ投票も行われる。それが二週間後にあるのだ。そこできつと私は枢機卿から外されるだろう。そうなったら聖国はおしまいだ。グローヌの派閥の者が枢機卿になれば、帝国や王国との戦争も考えられる」

「！！！！！！？」

「だからそれまでにグローヌの悪行の証拠をつかんで、あいつを失脚させなければならぬ」

「イマデア枢機卿。僕たちは今日の朝、大聖堂でグローヌ教皇に謁見えつけんしました。そこで感じたことがあるんですが、グローヌ教皇は邪神とつながっています」

「何!? 邪神だと!!」

「間違いないかと」

「邪神というと、ユーナが帝国で邪神の力を付与した首飾りをつけられたと聞いたが……」

「はい。三大国交流戦の後、邪神の信者と思われる者が姿を消しています。もしかするとその後、聖国に来て、教皇をなんらかの方法で殺したのかもしれない」

「そんなことが……」

「可能性としては高いと思っています。グローヌ教皇を直接見ましたが、それほど脅威は感じません

でした。それこそ証拠を残さずに前教皇を殺すことなんかできるとは思えないですね」

「ユーナも邪神のことに気づいたから捕まったと?」

「そうですね。その可能性もあります。ユーナは帝国で邪神の信者と会っていますし、邪神のことも知っています。邪神とグローヌがつながっていることが証明できれば、教皇の座から降ろすこともできると思います」

「なるほどな。だがそうすると、クリフくんかなりの負担をかけてしまうことになるが……」

「気にしないでください。元々、聖国へはユーナからの SOS で来たんですから」

「ありがとう、クリフくん」

「それじゃあ、今後の行動を決めていきますね。まずは邪神の影響がどれくらいの人に出てるのかを調べる必要があります。これは僕とグランでやります。僕たちなら邪神の気配に気づくことができますので」

「私たちは何をすれば?」

「イマデア枢機卿は、他の枢機卿の動きを調べてください。他の枢機卿もグローヌ教皇と同じ派閥ということは、今回の枢機卿の投票の件で、何かしらおかしな動きをするかもしれません」

「わかった」

「それから……」

その後、イマデア枢機卿たちと今後の行動を綿密に打ち合わせをして、解散したのだった。

イマデア枢機卿との会談を終えた僕たちは、銀の祝福亭に戻ってきていた。

そしてすぐにセリーヌたちと今後の行動について話し合った。

「なるほど。やはりユーナは教皇に捕まってるのですね。でも、それだとすぐにユーナを救出することは難しいですね」

「うん。前教皇の死が自然死じゃなくて他殺だったことを証明する証拠をユーナが持っていないかったら、最悪、ユーナを誘拐したことで僕たちが聖国を敵に回すかもしれない」

「大聖堂でのユーナ人気はすごかったですね。でもそうになると、教皇と邪神のつながりを示す証拠を私たちが見つけられないといけないってことです」

「うん。二週間後に新しい枢機卿を決める投票があるらしい。その投票でグローヌ教皇派の人が四人、枢機卿になるだろうってイマデア枢機卿は言ってた。逆に考えれば、それまでは教皇はユーナに手出しができないってことだと思う」

「今聖女に何かあると、教皇の座や枢機卿の座までどうなるかわからないからね」

ジャンヌも頷く。

「うん。だから今から二週間以内に教皇と邪神のつながりを決定づける何かを見つけること、見つけたらユーナとお付きのアスカの救出。救出したら教皇を追い詰めて失脚させる。さらに、邪神の信者がいるなら一緒に捕まえる。流れにするとこんな感じかな」

「やらないといけないことはわかったわ。でもクリフ、これからどうやって行動するの？」

「そこなんだよな。どうしたもんか……。ジャンヌは何かい案はないか？」

「そうね……。…」

ジャンヌはどうすれば邪神とのつながりの証拠を見つけることができるか考えているようだった。

そして……

「クリフくん、わかるるところから決めていこうよ」

「ソフィア？」

「とりあえず、教皇と邪神がつながってる証拠を見つける必要があるってことは、教皇の行動を見張る必要があるよね？」

「そうだね。投票までに邪神か、邪神の信者と接触する可能性があるから、グローヌは見張らないといけないね」

「なら見張る人が必要でしょ。そしてバレずに教皇を見張ることができるのは、この中じゃクリフくんかグランしかいないわよね？」

「うん。そうだね」

「そして、教皇を見張るってことは大聖堂に忍び込まないといけないわよね？」

「うん」

「ならユーナの居場所も同時に探って、閉じ込められてる場所がわかれば、イマデア枢機卿にした

ように念話を使ってユーナと話ができるんじゃない？」

「!? 確かに!! ユーナと話ができれば、邪神のことも何かわかるかもしれない」

「でしょ。だから大聖堂に行つて、教皇の見張りとユーナとの接触をクリフくとグランの二人でするのがいいと私は思うわ」

「ソフィアすごい!!」

「ええ。ソフィアの場合はすごくいいと私も思います」

「私だって色々考えてるのよ。セリーヌやジャンヌばかりクリフくん役に立って悔しかったんだから。私もできることを考えて、クリフくんの役に立ちたいのよ!!」

「ソフィア……ありがとう。よし。ソフィア以案で動いてみようか。あとは……」

「ええ。私とセリーヌとジャンヌ、それにスィムちゃんにクインちゃんね」

「危ないことはしてほしくないんだけど……」

「クリフくんの言いたいことはわかるわ。でも、私たちだってクリフくんについていくためにグラソにお願ひして修行したのよ。それに行動せずと宿にいるなんて嫌よ! 今もユーナは教皇に捕まってるんでしょ? 私たちもできることをしたいわ」

「ソフィア」

「クリフ様。ソフィアの言う通りです。私たちにも何かさせてください」

「護衛はスィムとクインがいるから大丈夫でしょ。クリフ、私たちにも手伝わせて!」

ソフィア、セリーヌ、ジャンヌがそれぞれにやる気に満ちた表情で迫ってきた。

「みんな……。わかったよ。みんなでここまで来たんだ。よし!! みんな協力してくれ!!」

「[[は]]」

「任せるのじゃ」

「[[任せて]]」

「それじゃあソフィアたちは枢機卿の投票について、聖都の人たちから情報を集めてくれるかな?」  
「どういうこと?」

「グローヌが教皇になったから、枢機卿は一人空きが出てるでしょ? そしてイマデア枢機卿以外の方が枢機卿になるとしたら、新たにグローヌ側の人間が二人枢機卿になる。誰がなりそうか、どんな人物なのかを、投票権を持つ聖都の人たちに聞いて回ってほしいんだ」

「なるほど。もしかしたらそこに不正だったり、何かしら、邪神の痕跡みたいなものが見つけられるかもしれないわね」

「うん。もしグローヌ教皇派の中で幹部が四人しかいないなら問題はないだろうけど、枢機卿候補がたぐさんいるなら、他を出し抜いて枢機卿になりたい人がいるかもしれない。そういったことがわかれば集中して調べべき人物とかが他にいるかもしれないしね」

「わかったわ。枢機卿のことは私たちに任せて」

「でも気をつけてね。イマデア枢機卿とも必要以上にコンタクトは取らない方がいいと思う。ただ

でさえ既に僕たちは教皇側に警戒されてる。慎重に進めていこう。僕の方も必ずユーナとコンタクトを取るから」

「わかったわ。じゃあ明日から行動開始ね。每晚ここで成果を報告し合う形でいいかしら？」

「そうだね。毎日情報を交換して、一週間ぐらいで次の行動に移ればいいかな。あっ！でも焦らないこと!! これだけは守ってね」

ユーナ救出行動の計画が立ったところで明日に備え、僕たちはそれぞれ部屋に戻っていくのだった。

## 第68話 大聖堂をくまなく調べろ!!

僕はグランとともに、早速大聖堂に向かった。

「グラン。とりあえず大聖堂をくまなく調べてみよう。グランは邪神の痕跡を調べてくれ。強く力が残ってるところとか、場所によって色々違うと思うんだ」

「うむ、そうじゃな。反応が強いところがあればそこには何かがある、ということじゃな？」

「うん」

「マスターはどうするのだ？」

「僕はユーナを探すよ。今日中にユーナのいる場所を見つけたいと思ってる」

「そうじゃな。じゃがマスター自身も言っておったが、焦りは禁物じゃぞ？」

「わかってるよ。今日は場所を把握するのと、大聖堂内の人員とかをチェックしようと思う。念話ができる場所とかも見つけないといけないしね」

「うむ。詳しいことは明日以降に調べていく感じじゃな」

「うん。とりあえず二手に分かれて行動しようか」

「わかった。何かあれば念話で連絡するでしょう。我とマスターなら、距離が離れていても念話が可能じゃ。それに我が念話を邪神側に気づかれないようにするから安心してよいぞ」

「さすがグラン。助かるよ。念話って、やっぱり外から探られることがあるの？」

「もちろんじゃ。念話をする場合、要は人と人を魔力でつなぐ感じじゃからな。わかる者には念話をしていることもバレるし、なんだったら内容を聞くこともできるぞ」

「まじか……」

念話は万能だと思ってたけど、使う時は気をつけよう……

大聖堂に侵入した僕たちは、上の階をグランが、下の階を僕がそれぞれ調べることにした。

地下への階段を見つけると、一部屋一部屋入念に確認していく。

「部屋の数が多いな……ユーナの魔力が地下にあることまではわかるんだけど、どこにいるかま

ではまだわからないな……。なんか魔力を阻害するようなモノでもあるんだろうか……」  
部屋の構造を頭に入れながら、どんどん地下を調べていく。

「地下にはあまり人がいないんだな……」

(グラン？ 聞こえる？ そっちはどんな感じ？)

(こっちは邪神の痕跡をいくつか発見したぞ。あまり深入りせずに、痕跡のあった場所をマークして感じるじゃ。マスターの方はどうじゃ？)

(地下にユーナがいることは魔力の感じでわかるけど、どこにいるかまではわからないだよね。部屋の数が多いから一つ一つ中を見ていつてるけど、どれも同じような部屋であんまり収穫はないかな)

(部屋の中まで入っておるのか？)

(うん。こっちはあまり人がいないからね。中に人がいるかどうかは魔力を探ればわかるし)

(なるほどのお。逆にこっちはどの部屋も人がいるから、むやみに入ってはおらんぞ)

(まあ上の階は執務室とか色々、仕事する部屋が多いんだろ？ おっ!!)

(どうしたのじゃ？)

(ユーナの魔力を見つけた。一旦切るね)

「地下二階からユーナの魔力を感じる。この下か……慎重に進もう。『インビジブル』も万能じゃないからな。ここで見つかったらせつかくの作戦が台なしだ」

ユーナの魔力を感じた僕は、階段を下りていく。

地下二階は部屋が一つしかないようで、そこまでの長い通路を歩く。

「ここにユーナがいるっぽいな。どうしよ？ 話しかけた方がいいかな……中には二人しかいないみたいだし、もう片方はアスカで間違いなさそうだな」

ユーナとアスカ以外に人がいないことを確認したが、僕はどうするか考えこんだ。

「うくん。でもグランと今日は確認だけって決めたからな……」

迷った挙句、ユーナの居場所を確認するにとどめて、地下二階の探索を終了した。

「一応、ユーナたちがいる部屋の上の部屋だけでも一回調べておこう。上の部屋から念話できるなら、誰にも見つからずにコンタクトが取れるしな」

地下一階に戻り、ユーナたちがいる部屋の真上の部屋に入った後、グランに念話をした。

(グラン。ユーナを見つけたよ)

(おっ！ さすがマスターじゃ。で、どんな感じじゃった？)

(話しかけてないから詳しくはわからないけど、魔力が弱ったりはしてなかったから大丈夫だと思っう。ユーナの他にはお付きのアスカだけだったよ)

(そうか……うむ。今はどうしてるんじゃ？)

(明日にでも念話でユーナにコンタクトを取ろうと思ってるから、一応ユーナたちがいた部屋の真上の部屋にいるよ。グランの方はどう？)

(うむ。教皇の部屋は見つけた。じゃがさすがに中には入れんから、近くの人がいない部屋から様子を探っておったところじゃ。やはり教皇の部屋が一番邪神の魔力の痕跡があるな)  
(やっぱり……。教皇が部屋にいない時に中に入れたらいいんだけど……)

(そうじゃな。今日は大聖堂内には邪神の信者はいないみたいじゃ。痕跡は残ってるが、強い邪神の気配は感じられんからのお)

(了解。じゃあ一度外で落ち合おうか。もうけっこうな時間が経ってるから、今日のところは引き揚げよう。今日のことをセリーヌたちに話して、明日はユーナとコンタクトを取って、可能なら接触してみよう)

(そうじゃな。我は引き続き教皇を見張って、可能なら教皇の部屋を調べるって感じかのお)  
そうしてグランとともに大聖堂から、銀の祝福亭に戻った。

しばらくすると、セリーヌたちも戻ってきた。

お互いに情報を交換して、翌日のユーナとのコンタクトに備える。

ちなみにセリーヌたちの方は、聖都の住民に話を聞いてうまく情報を集められたみたいだ。  
何日か継続して聞き込みをすれば、気になる情報が何かしら入手できそうだった。

☆

「今日はユーナに話を聞いてくるよ」

朝、全員の前で僕は早速、今日の予定を話した。

「昨日言ってたように、救出するんじゃないって話を聞いて、教皇の情報と今の状況を聞くわけね」

「うん。ユーナのことは心配だけど、昨日の感じじゃそれほどひどい状態にはなってないみたいだからね。今、大聖堂からユーナがいなくなると、教皇がどういった動きをしてるかわからない。

僕たちには情報が圧倒的に足りてない。今、教皇の情報を一番持つてるのはユーナだと思う。念話なら、周りに気づかれずに話ができると思うからね」

「うむ。我も昨日マスターと大聖堂を調べたが、念話を妨害したり、念話の内容が聞かれるようなことはなかった。それに邪神の痕跡はあったが、普段は大聖堂に邪神の関係者はいないのかもしれない。もしいれば、もつと禍々まがまがしい気配を感じ取れたはずじゃ」

「でもグラン、昨日はいなくても今日はいるかもしれないわ」

「そうじゃな。ソフィアの言うように、昨日と今日は違うかもしれない。あくまで昨日と同じように念話が可能と判断したらユーナと話をする、ということじゃな」

「そうだね。僕たちが大聖堂を調べてるって教皇側にバレないようにすることが最優先だからね。その辺は十分注意するよ」

「私たちはイマデア枢機卿に会ってこようと思ってるわ」

「ジャンヌ……大丈夫なの？」

「ええ。他の枢機卿には昨日話を聞いてきたの。どちらも次の投票は余裕そうな雰囲気だったわ。そうやって全ての枢機卿に話を聞くことは別に不自然じゃないし、それに、私は王国を代表してきているのよ。今の聖国の状況とこれからのことを、父に報告しないといけないからちようどいいわ」

「そっか、わかった。でもくれぐれも気をつけてね。多分、イマデア枢機卿の周りは教皇側の監視が多にいると思う。セリーヌの魔眼を使って教皇側の情報を調べてほしいけど、安全が最優先だからね」

「わかってるわ。任せて」

今日の行動をそれぞれ確認し、僕はグランとともに昨日と同じように大聖堂に向かった。

「グラン、さっき言ってた話だけど、邪神の関係者が大聖堂にはいないって本当？」

「うむ。邪神の関係者があそこで生活しているならわかるはずじゃ。多分じゃが、あそこは元々女神信仰の総本山じゃ。聖なる力が働いて、邪神側には居心地が悪いのかもしれない」

「なるほど……確かに、言われてみればそうだね。でも聖なる国が邪神と手を組むって、よくよく考えたらあり得ないよね」

「まあ女神を信仰している国と言っても、結局は人間じゃからな。誰しも欲はあるものじゃ」

「そういうもんか」

まあ教皇が悪に染まるっていうのは、もはや異世界のテンプレだもんな。今までもテンプレはけっこう起こってきたけど、ここでもちゃんと異世界の王道を外してないあたりがさすが！ って感じだな。

僕とグランは周りに気づかれぬように姿を消して、大聖堂に入った。

「よし、じゃあ僕は早速地下に下りてユーナの状況を確認してみる。それで、周りに誰もいないようだったら念話で話しかけてみるよ。グランはどうする？ 一緒に来る？」

「いや。我はそれほどユーナとは親しくない。昨日と同じで教皇の部屋を探るとしよう。教皇がいなければ部屋を調べようと思う。それができれば、何かしら見つかると思うからのお」

「わかった。グランなら問題はないと思うけど、気をつけてね」

「マスターものお」

「うん」

僕は昨日調べたユーナたちがいる部屋の真上の部屋に向かうことにした。

「さて、誰もいないと助かるんだけど……」

誰にもバレないように姿を消し、周りの人間の魔力を感知しながらゆっくりと目的の部屋に向かう。

「良かった。誰もいないみたいだ」

部屋に入つてすぐ、真下の部屋の魔力を探ると……

「昨日と同じだな。それに……近くに他の魔力反応もない。この部屋の周りにも反応はない。ちょうど良かった。まあご都合主義っていうのも立派なテンプレだからな」

主人公補正というモノがきつちり働いてるんだろうな〜と思いつつ、念話を使ってユーナに話しかけた。

(ユーナ、ユーナ。聞こえる?)

「!? クリフ様?」

「どうしたの? ユーナ?」

ユーナが急に僕の名前を呼んだので、アスカがユーナに問いかけている。

「今、クリフ様の声が聞こえた気がして……」

(今、ユーナがいる真上の部屋から念話で話しかけてるんだ。頭の中で会話してみてるかな。

それで話ができるから)

(!? こうですか……?)

(うん、聞こえるよ。久しぶりだね)

(クリフ様、来てくれたんですね。良かった)

(もちろんだよ。朝のお祈りにも行つたんだよ。ユーナを見かけたけど、お祈りが終わるとすぐに

大聖堂の中に入っちゃつたし、大聖堂の中で会えるように頼んだけど断られたんだよ。ちよつとやばい感じになってると思つたから、人目につかないように上の部屋から念話してるんだ)

(そういうことなんですね)

「ユーナ? 大丈夫? ぼーつとして?」

「ええ。大丈夫よ」

(クリフ様、アスカとも念話できますか? ここには私とアスカしかいませんから、アスカも一緒につないでくださると助かるのですが)

(大丈夫だよ。アスカの魔力も把握してるから)

僕はすぐにアスカとも念話をつなぎ、今の状況について確認した。

(それで? ユーナたちは今、どういう状況なの? イマデア枢機卿と話したけど、ユーナが前教皇の死の真相を調べて、教皇に捕まってるって聞いているけど)

(その認識で合ってます。私とアスカは、マリオ教皇の死が不自然に感じて、グローヌに殺されたんじゃないかと思つて大聖堂を調べていました。そして、調べていくうちにグローヌと邪神がつながつてることがわかつたんです)

(やっばり……)

(クリフ様も邪神の存在に気づいていたんですか?)

(うん。この大聖堂に邪神の痕跡が多数残ってるのを、グランが見つつけてね。今も教皇の部屋をグ

ランが監視してくれてるよ)

(そうなんですね。私の場合、ちょうど運悪くグローヌと邪神の信者が話しているところを目撃してしまつて……)

(邪神の信者？ ユーナはグローヌが話してる相手が邪神の信者つてよくわかつたね?)

(それはもちろん。だつてグローヌと話していたのは、帝国で会つたマイだったんですもの)

(!? 帝国で姿を消したと思つたら、やっぱり聖国に来てたのか……)

(そうみたいですわね。ここじゃメイつて名乗っていました。私は帝国で会つてるからすぐにわかつたんです。まずいと思つて逃げようと思つたんですが、捕まっちゃつたんです)

(そういうことか……)

(それで、アスカとアスカの両親も人質に取られてるんです。だから、私も下手に動けなくて……)

(だから朝のお祈りだけして、あとはずっと大聖堂にいるんだね)

(はい。朝のお祈りの時間だけ、ここから出られるんです。逃げることもできるけれど、アスカも捕まつてるし、アスカと一緒に逃げ出してもアスカの両親が別の所で捕まつてるから動けなくて……)

(アスカの両親がどこに捕まつてるかわかつてるの?)

(いいえ。アスカもわからないわよね?)

(はい。両親が捕まつてることは、グローヌから聞きました。あれから家にも帰れていません。

ずっと帰つてないから親も不審に思うはずなのに、何も起きていないところを見ると、グローヌの言うように聖都のどこかに監禁されているのかもしれない)

(アスカの両親についてはこつちで調べてみるよ。アスカの家の場所、教えてくれる？ 一応家を先に調べてみるよ)

(ありがとうございます、クリフ様)

(それで、イマデア枢機卿の話では、二週間後の枢機卿の投票で、グローヌ教皇派の人間が四人、枢機卿に選ばれるみたいなんだ。そうなるともう教皇に手出しできなくなるから、それまでにグローヌを失脚させたいんだけど、ユーナはグローヌと邪神の関係を示す証拠を何か持つてないかな?)

(……すみません。目撃しただけで、証拠と言えるものは……)

(それだけじゃ、多分証拠としては弱いよね)

(そうですね)

どうすればいいんだろ……邪神の信者とグローヌがつながつてるのは、ユーナの証言で確かだとわかつた。あとはそれを証明するだけなんだけど……

(ユーナ、マリオ教皇の遺体を調べるのどうかしら？ グローヌはマリオ教皇が死んだ後、誰にも遺体を見せずに聖なる塔に遺体を移動したわ。それつてマリオ教皇の遺体に何かあるからじゃない?)

(確かにそうね。でも、聖なる塔には教皇しか入ることができないわ)  
(聖なる塔?)

(はい。大聖堂の裏にある大きな塔なんです。そこは歴代の教皇が祭られている場所で、代々教皇となった者が管理しているんです。中は私も見たことがあります)

(おうな)。テンプレのおいだ。聖なる塔を使って何かしようとしている？ 邪神の信者は聖なる塔にいる？ 歴代の教皇の遺体を使って何かしようとしている？ 教皇といえば聖国のトップだ。しかも歴代の教皇が祭られている。例えば遺体を供物にして邪神を復活させるとか……うゝん。異世界の王道としてあり得る。

(調べてみる価値はありそうだね。僕の勘では、邪神の信者もそこにいる気がする。グランが言うには大聖堂にいないみたいだし)

そうやってグローヌ失脚への道筋が立ってきたと思ったところで……

(やばい。こっちに誰か近づいてくる)

(えっ……)

気づかれたか？

(ユーナ、もうしばらくここにいてくれ。枢機卿の投票が終わるまでは安全だと思う。聖なる塔とアスカの両親についてはこっちに任せてよ)

僕はユーナたちに伝えた後、念話を切り、『転移』でその場を離れた。

「ふゝ。危なかった。なんか一直線に僕がいる所に向かってきてたから、『転移』で逃げたけど。あのままあそこにいたら危なかったかも……」

☆

その後、クリフがいた部屋のドアが開き、中に人が入ってきた。

「誰もいない!! くそっ。逃げられたか……。メイ様の話では、ここに侵入者がいるとのことだったが……」

☆

僕は銀の祝福亭に戻ったが、しばらくするとグランも戻ってきた。

「グラン!？」

「マスターよ、無事じゃったか。いきなり大聖堂からマスターの魔力が消えたから、何かあったのかと思ってな。我も『転移』で帰ってきたのじゃ」

「心配かけたみたいだね。でも大丈夫だよ。ユーナと念話してる時に、僕がいる部屋に一直線に向かってくる人がいたから、念のために『転移』で逃げただけだよ」

「マスターがいた場所に一直線に……。そうすると向こう側は、念話を感じずるアイテムか何かを持つてるのかもしれないな」

「そうだね。でもユーナと話して、グローヌ教皇を失脚させる方法も見つかりそうだから、セリーヌたちが戻ってきたら作戦会議だ。گرانの方はどうだった？」

「うむ。我もおもしろいモノを見つけてきたぞ。セリーヌたちが戻ってきたら、我からも話をしよう」

その日の晩、僕たちはそれぞれが得た情報を元に作戦会議を行った。

「じゃあ、先に私たちから話をするわね」

そう言って、ジャンヌが調べたことを話し始めた。

「昨日は、ゼイロン枢機卿とアマリ枢機卿に会って話を聞いてきたことは言ったわよね」

「うん。どちらも次の投票は余裕って感じだったんだよね？」

するとセリーヌも口を開く。

「そうですね。もしかしたら私の目のことが知られているかもしれないので、あまり長時間は使えなかったのですが、魔眼を使った感じでは、あの二人は今回の件とはあまり関係なかったですわ。

単純にグローヌ教皇の言いなりって感じで。従つてれば何も問題ないって感じでしたから」

「そうだったんだ。それで？ 今日はいマデア枢機卿と話をしてきたんだよね」

「ええ。周りにスパイがいる可能性もあったから、当たり障りのない話しかしなかったわ。だけどイマデア枢機卿から手紙を預かってきたわ」

ジャンヌから手紙を受け取り、内容を読むと――

「クリフ？ 何が書いてあるの？」

「うん。イマデア枢機卿は、次の投票で枢機卿になりそうな人物を調べてくれたみたいだ。カイロンとケイロンっていう双子らしい」

「『カイロンとケイロン!?!』」

「知ってるの？」

「ええ……」

戸惑うジャンヌの様子を受けて、ソフィアが話し始める。

「クリフくん、私たちは昨日と今日、聖都を色々回って色んな人から話を聞いたわ。その中で、カイロンとケイロンの双子の司祭は、夜な夜な家を抜け出してどこかに行っているとか、街のロクデナシと話してるのを見たとか、けっこう悪い噂が流れているのよ」

「まじか……」

「ええ。正直そんな悪い噂が流れる人が枢機卿になるなんて、信じられないわ」

「きつとグローヌの権力が強いんだろうな……」

「それで、クリフ様はどうでしたか？ ユーナとはコンタクトが取れたんでしょう？」



「ああ。もちろんだよ」

僕は今日の出来事をセリーヌたちに話した。

「聖なる塔……。話を聞く限り、そこが怪しそうね」

「そうなんだ。でも鍵は教皇が管理してるから……。ユーナ中には入ったことないみたいだし。まあ明日見に行ってみようと思う。どこかに入り口があるかもしれないし」

「マスターよ。その鍵っていうのは、もしかしてコレのことじゃないかのお？」

そう言っつて、グランは僕の前に一つの鍵を出した。

「グラン!? これは？」

「うむ。我はマスターと別れた後、教皇の部屋を探っていたんじや。教皇はずっと部屋の中になのじやが、ふと部屋を出てどこかに行くタイミングがあつてのお。そのタイミングで、少しじやが部屋に入ることができたのじや」

「それでこの鍵があつたの？」

「ああ。あまり時間がないと思つたのでな、一番邪神の痕跡が残つてる所に狙いを定めて調べたら、その鍵があつたのじや」

「でもグラン、その鍵を持ってきたらやばいんじや……」

「安心してよいぞ。これは教皇の部屋にあつた鍵を複製したものじや。マスターよ。我はスライムぞ。鍵の複製ぐらい簡単にできるぞ」

「!! さすがグラン!!」

「うむ。もつと褒めていいぞ!!」

「グランが持ってきたこの鍵は、聖なる塔の鍵の可能性が高い。しかも邪神の痕跡も残っているということは……」

「そうですね。帝国で会ったマイっていう邪神の信者が、聖なる塔にいる可能性もあるかもしれないませんね」

「うん。明日早速調べてみるよ。まだ投票までは時間があるから、明日は塔の周りと、外から中を探れそうならやってみるよ」

「そうじゃな。昨日と今日、教皇の部屋を探ってみたが、教皇は部屋からあまり出ないみたいじゃ。教皇が聖なる塔にあまり行っていないなら、マスターが中を調べることもできるじゃろう」

「そうだね。まあどんな感じなのかは、直接行って確かめるよ。それに一応、この鍵が聖なる塔の鍵かどうか確認する必要があるしね。中にマイがいるかもしれないから、気をつけながら調べよ」

「わかったのじゃ。なら、我は今日マスターの存在に気づいた者を探ってみるか」

「できるの?」

「わからんが、念話を感じするほどじゃからな。我の眷属<sup>けんぞく</sup>たちを使って調べてみよう」

「助かるよ」

「私たちは引き続き、聖都で情報集めね。カイロンとケイロンのことを中心に探ってみるわ」

「うん。何度も言うけど気をつけてね。けっこう順調に進んでるから気が緩むと危ないし」

「わかってるわ。それはクリフも一緒よ」

「うん、わかってる。あつ、それとこのことをイマデア枢機卿にも知らせてくれるかな? 何か協力してくれるかもしれない」

「わかったわ。私が手紙を書いて、さりげなくイマデア枢機卿に渡すようにするわね」

「頼んだよ、ジャンヌ」

「聖なる塔で前教皇の遺体を調べると、邪神と教皇のつながりも調べるのよね。その後ユーナを助けるの?」

「うん。ユーナを助けるのは教皇を失脚させる時になると思う」

「そうして作戦会議を終え、僕たちはグローヌ教皇失脚に向けて着実に前進していくのだった。」

## 第69話 聖なる塔への侵入は可能なのか……

調べた点と点がつながり、ユーナを助けるための行動が線となって結果に結びついていることに安堵しつつ、僕は警戒しながら聖なる塔に向かっていった。

今日は塔を調べるのと、どうやって中に入るか決めないと……

聖なる塔は代々教皇のみが入ることのできる塔で、今まで教皇以外の人間が単独で中に入ったことはない。もちろん教皇と一緒に中に入った者はいるみたいだ。

異世界テンプレなら、絶対聖なる塔の中にはマイがいるよな。そして、侵入は問題なくできるけど大事なところでマイが見つかる、とか……あとは塔を調べてる間に大聖堂が何者かに襲われる、とかかな。あっ!! 聖なる塔で決定的な証拠を見つけて出てきたら誰かが捕まってる、っていうのもよくあるやつだな……

この世界に転生してから、僕は数々のテンプレを経験してきた。僕の中ではもはやこの世界はテンプレに溢れ、王道のテンプレは発生して当然! という認識になっている。

「さて、聖なる塔はあれだな。ここから見ると真つ白で綺麗だな。まさに聖なる塔って感じだ」

塔の周りをグルッと一周し、様子を確かめる。

「ふー、入り口はあそこ以外にはなさそうだな。大聖堂の中から地下でつながってるって可能性もあるけど……。でも大聖堂の地下はくまなく探したんだよな。じゃあ、あの扉の向こう側に入り口があるかも……か」

塔の裏側の扉を越えて、別の入り口がないか探した。

「そうだな。よくあるのは井戸の中からつながってる、とかかな……。いや、さすがにそれはないか。あれはゲームの話だもんなって……。あるじゃん井戸!」

塔の裏側は住宅地になっていて、奥に古びた井戸があった。もしかしてと思い、井戸に近づく。

「確かにこの大きさなら、井戸の中には入れるけど……」

そこでその辺にあった石を拾い、井戸に落としてみた。

すると……数秒経ってボチャンという水の音が聞こえた。

「やっぱり普通の井戸か……」

井戸が聖なる塔とつながっているという予想は外れたのだった。

「となると、あとはつながってるとしたら下水道とかかな……。王城とかなら秘密の通路があつて、緊急用に使ったりするんだらうけど、聖なる塔は代々の教皇が祭られてるっていう話だから、緊急用もクソもないもんな」

僕は他の入り口を探すのを諦め、塔の前に戻った。

「入り口は一つ。そして入り口の前には門番。気づかれずに中に入るのは不可能……か」

聖なる塔の入り口には兵士が二人、槍を持って立っていた。

「だけど、あそこに入るのって教皇だけだよな? 兵士なんか立っても意味ないんじゃないかな。それか、中に誰かが入ると困るから兵士に見張らせている……とか?」

塔の入り口に門番がいるのは不自然だと感じた僕は、ユーナにそのことを聞くことができないかと思つた。

「確かユーナがいた部屋って、だいたいこの下あたりだよな。地下の部屋に行かなくても、ここ

からなら念話できるかも」

僕は意識を下に向けて、ユーナの魔力を探る。

「見つけた」

(ユーナ、アスカ、聞こえる?)

(クリフ様? 聞こえますわ)

(良かった。ちょっと聞きたいことがあるんだ。今ちょうど聖なる塔を調べてるんだけど、入り口に槍を持った兵士が二人いるんだよね。ここってそんなに重要な塔なの? 教皇しか入れないのに、門番とかいるのかな? って思ってた……)

するとユーナが答える。

(クリフ様、塔の入り口に兵士が立ってるのですか? それは変ですね。クリフ様が言われるように、教皇が鍵を持ってるので教皇以外は入ることができません。なので、門番なんかはいなかったはずですよ)

(ユーナの言う通り、聖なる塔に門番はいませんでした。間違いありません)

(やっぱり)

(どういふことですか?)

(きつと、前教皇が死んだ後に入り口に兵士を立てたんだ。もしかしたら教皇以外の者も出入りしてるのかもしれない。それこそ、邪神の信者とかが)

(!? 本当ですか?)

(間違いないよ。だってそうじゃないと兵士が入り口の前に立って警戒するはずなもの)

(確かに……クリフ様の言う通りですね)

(ユーナ、アスカ、ありがとう。疑問が解けてスッキリしたよ)

(いえ。お役に立てて良かったです。今の私は何もできませんので)

(そのうち助けに行くから、今は待っててね)

僕はそう言っただけで話を切った。

「塔の中は魔力が全く感知できない。そして、塔の入り口には見張りが二人いて、その見張りは最近置かれるようになった。やっぱり中に入って見る必要があるな。まあ、今日のところはこんなものか。グランやセリーヌと相談して、どうやって中に入るか決めよう」

僕は塔の中への侵入を諦めて、銀の祝福亭に戻るのだった。

☆

グランたちを待っていると、全員が一緒に銀の祝福亭に帰ってきた。

「一緒だったの?」

「ええ。別々に行動してたんだけど、街中でバッタリ会ったのよ。そこからは一緒に行動して

たの」

「それって……」

「ええ。詳しくは部屋で話すわ」

部屋に入ってテーブルを囲み、全員が席に着いたところでグランが話し始めた。

「我は今日、眷属たちを使って聖都の街中を調べたのじゃ。邪神の痕跡がどこにあつて、それがどうつながつてるかを知るためじゃ」

「そういやグランの眷属って赤いスライムだよ。街中でスライムって、騒ぎにならなかったの？」

「マスターは知らなかったのお。我の眷属たちはな……姿を変えられるのじゃ」

そう言つて、グランは目の前に一体の赤いスライムを出した。

スライムだからな、グランみたいな人型に変わるのだろうか……。テンプレなら僕と同じ姿になつたりして……

注意深く赤いスライムを見てみると、徐々に色が変わつていき、最終的には見えなくなった。なんと色が透明に変わったのだ。

「見えなくなった!?」

「うむ。色を変えたんじゃない。どうじゃ？ これなら街中に我の眷属たちがいても目立たぬじやろう？」

「そうだね。姿を変えられるつて言つたから、てつきり僕とかセリーヌの姿になるのかと思つ

たよ」

「それは人化じゃからな。形を人型にすることはできるが、マスターとそっくりの姿を真似ることは難しいのお」

「なるほどね。それで街中を調べてくれたんだね。結果はどうだったの？」

「うむ、邪神の痕跡は至る所にあつた。そこまで濃い所はなかったのじゃが、聖都全域には広がつておつた」

「そこまで……」

「それでその後、痕跡が濃い所を直接調べてみようと思つて出向いたら、セリーヌたちがおつたのじゃ」

「クリフ様、私たちはイマデア枢機卿に昨日のことを書いた手紙を渡した後は、カイロンとケイロンのことを調べていました。そして、一応拠点がどこにあるかわかつたのでそこに行つてみたんです」

「それは……大丈夫だったの？」

「安心して、クリフ。私たちは拠点の場所を確かめるために行ったんであつて、直接話はしてないわ」

「それで、カイロンとケイロンの拠点は同じ場所にありました。双子なので、同じ所で仕事をしているのでしょう。どんな人物が出入りしているのか、近くのカフェでお茶をしながら見ていたら、

グランが現れたんですわ」

「それってつまり……」

「うん。カイロンとケイロンは邪神と何かしらのつながりがあるってこと。もしかしたら、昨日クリフくんのことを探っていたのもその二人かも」

「グローヌ教皇、邪神、枢機卿、カイロン、ケイロン……」

色々な要素がつながってくる気がして、頭の中で今回のことを整理した。

邪神の手伝いをしているカイロンとケイロンが次の枢機卿に選ばれる。街中に邪神の痕跡が点在していることから、投票でカイロンとケイロンに票が集まるように仕向けていると考えていいかも。そして、カイロンとケイロンはグローヌ教皇派閥……

「クリフの方はどうだったの？ 聖なる塔の中には入れたの？」

「ああ。それがね……」

門番が立っていたから中に入らなかったこと、その門番は最近立つようになったこと、をジャンヌたちに伝えた。

「それって、中に誰かがいるって決まったようなもんじゃない？」

「だよ。だから今日は中に入らずに帰ってきたんだ」

「クリフくん!! それならずと聖なる塔を見張ってれば、誰が出入りしているかわかるんじゃない？ それにそこって教皇しか入れないのよね？ 他の人が入るところを写真機で撮影すれば、証

拠になるんじゃないかな」

「写真機!? この世界ってカメラがあるの？」

「カメラ？」

やべっ!! 転生したことは誰も知らないだった。

僕は咄嗟とつさにごまかした。

「写真機って魔道具だよ？ そんなの持ってないよ」

「ふふふくん。本当、私たちって運がいいわ。今日、イマデア枢機卿が写真機を貸してくれたの。

何か調べるなら使いなさいって」

まじか。なんてタイミングだ……これぞ主人公特典!

「聖なる塔にカイロンかケイロン、あるいは他の枢機卿が単独で入るところを撮影できたら、投票で枢機卿に選ばれるのを防げるかも。これはでかい」

「もしかしたら、イマデア枢機卿もその辺の情報を持っていたのかもしれないわね」

「じゃあ、しばらく僕とグランが塔を見張ってみるよ」

「私たちはどうしたいのですか？」

「セリーヌたちはイマデア枢機卿と情報を共有して、枢機卿を手伝ってあげて」

「わかったわ」

これで一つ、決定的な証拠がつかめそうだな。だけど、グローヌ教皇を失脚させるにはまだ

ちよつと弱い……。やっぱり聖なる塔には一度入ってみる必要があるそうだな。

☆

そして、聖なる塔を監視すること三日……

見事にカイロンとケイロンが塔に入るところを撮影することに成功したのだった。

だが二人以外、教皇や邪神の信者など他の人が出入りすることはなかった。

「やったわね、クリフ！」

「うん。こんなにうまくいくとは思わなかったけどね」

「それじゃ、これを教皇に叩きつけてやりましょう!!」

「ジャンヌ、この証拠だけじゃまだ弱いよ。これを出したところで、カイロンとケイロンが消されるだけで、枢機卿の投票にはまた別のグローヌ教皇派の人間が出てくるだけだと思っ」

「そんな!? じゃあどうするの?」

「一応これは決定的な証拠になるから、イマデア枢機卿にも渡しておこう。そのために何枚か写真は撮ってあるから。それと三日間聖なる塔を見張っていてわかったけど、あそこはあまり人の出入りがないみたいだ」

「それって中に人はいないってこと?」

「それは入ってみないとわからない。けどその可能性もあると思う。塔の中にずっといるか、聖人にはもういないかのどちらかだろうね。だから僕は一度塔の中に入ってみるよ。もしかしたら他の証拠も見つかるかもしれないしね」

「それは……クリフ様、危なくないですか?」

「そうかもしれない。だけど、僕なら危なくなっても『転移』で逃げることもできるからね」

まあ聖なる塔の中で『転移』できない可能性っていうのもあるけど、それを言うとは行かせてもらえないかもしれないからな。

「でも、どうやって入るのですか? 入り口には門番がずっと立ってるんですよ?」

「そこなんだよね。どうやって入るかはまだ決めてないんだ」

「入り口以外に入れる所はないんですか? 例えば秘密の抜け道みたいに、どこかにつながってる出入り口があるとか」

「その可能性も考えて扉の外側とかも調べてみたんだけど、それらしいものはなかったよ」

「なら、イマデア枢機卿に相談したらどうかしら? ちょうど証拠の写真相も渡さないといけな  
いし」

「そうだね、そうでしょうか。もしかしたらいい案を出してくれるかもしれない」

そして僕たちはイマデア枢機卿にコンタクトを取り、前回と同様、フロッグ亭で会談を行った。

僕たちが聖都で色々嗅ぎまわっていることは教皇側も把握して居るだろうと思い、今回は全員でフロッグ亭に来ていた。

会谈が始まるとすぐにイマデア枢機卿に証拠の写真を渡し、聖なる塔へ入ることを伝えた。

「この証拠はまさに我々が欲していたものだ。感謝する。この証拠を投票の時に出せば、カイロンとケイロンは枢機卿にはなれないだろう。逆に私はそのまま枢機卿の立場を継続できると思う。ありがとう」

「いえ。でもまだユーナを助け出せていませんし、この証拠だけじゃ、グローヌを失脚させることはできないと思います」

「そうだな……ふむ……。クリフくん、私とその門番二人を入り口から遠ざけよう」

「本当ですか!? そんなこと可能なんですか?」

「ああ。長時間は無理だろうが、少しの間だけならできると思う」

イマデア枢機卿は作戦を説明してくれた。

「確かにそれならいけるかもしれません」

「では明日、早速行動を開始するでしょう。クリフくん、くれぐれも気をつけてくれよ。君に何かあったらユーナに合わせる顔がないからな」

「わかってます」

☆

翌日、イマデア枢機卿は一人、大聖堂に向かっていた。正確には『インビジブル』で姿を消した僕が横にいるのだが。

イマデア枢機卿は小さな声で僕に話しかけてきた。

「クリフくん、昨日も言ったが、門番を入り口から遠ざけられるのは、せいぜい五分前後ぐらいだ。大丈夫か?」

「はい。それだけあれば、鍵を開けて中に入るには十分です」

イマデア枢機卿は大聖堂の裏に回り、塔の門番に話しかける。

「君たち!! 今、私の所に『聖なる塔に何者かが侵入した』と報告があった。君たちは何をしていたんだ!!」

イマデア枢機卿が門番を怒鳴っている。

「イマデア枢機卿!? いえ、私たちはずっとここにいましたので、誰も中には入っておりません」

「では私がウソを言っているというのかね?」

「それは……」

「お前たちじゃ話にならん。中を直接確かめる。お前たちは教皇にこのことを伝えてこい!!」

「しかし……」

「いいから早く行け!! 何かあったらお前たちの首が飛ぶぞ!」

「!? はい!! わかりました!」

二人の門番は、急いで教皇の元に走っていった。

「どうだね? うまくいっただろう!」

「ありがとうございます。イマデア枢機卿、さすがの演技でしたね!」

「そうだろうさ。さあ早く行ってくれ。急がないと教皇を連れて門番が戻ってくる!」

グランから預かった鍵を取り出して、入り口の鍵を開ける。

「やっぱりグランの持ってきた鍵は、この鍵だったんだな。イマデア枢機卿、それでは行ってきます!」

「ああ、気をつけてな。無事戻ってきたら知らせてくれ!」

「わかりました!」

「頼んだぞ……クリフくん!」

中に入り、扉を閉めて内側から鍵をかけた。

そうして、僕は無事に聖なる塔への侵入を果たしたのだった。

☆

しばらくしてグローヌ教皇を引き連れた門番が戻ってきたが、中を見られたくないのだろう、イマデア枢機卿が「中を確認した方がいい」と何度も言ったが、教皇は「鍵を持つてるから大丈夫だ」の一点張りだった。

イマデア枢機卿の作戦が見事にはまったのだった。

☆

僕は塔の中を歩いていた。

「さてと……塔の中に侵入できたはいいけど、こっつて歴代の教皇以外入ったことない場所なんだよな……。まずは何かがあるのかを調べないと。でも、人の気配がするんだよな。これってやっぱり邪神の信者がいるのかな……!」

そして僕は気配を探る。

「軽く五人はいるな……。まあ、見つからないように調べていくか!」

塔をゆっくりと上がっていく。もちろん『インビジブル』の魔法を使って姿は消している。

調べながら上へ上へと上がっていくが、怪しいところは全くなかった。

「あとは最上階だな。他は特に怪しい部分はないな!」

各階にいくつかの部屋があり、それらを調べていったが、あったのは歴代の教皇が書いたと思わ

れる日記や歴史の本などが残った、教皇が過ごしたであろう部屋と、教皇を祭っているであろう部屋だけだった。

「さて……最上階には着いたけど、人がいるのはこのドアの向こうだな。でもあれだな、ドアを開けたらきつとバレるよな。どうしよ……」

最上階にはドアが一つあるだけだった。そして人の気配は、そのドアの向こうからしている。ドアを開けると、もちろん僕が侵入したことがバレる。

「でも、ここまで来て引き返すって選択肢もないよな……。しょうがない、突撃するか」

こっそり入ることが無理だとわかったので、豪快にドアを破壊し、中に入った。

すると……

大きな部屋の真ん中には赤色で描かれた魔法陣があり、その中心には人が横たわっていた。

そして、その魔法陣の周りでは黒いローブを着た男が五人、本を読んだり、話し合ったりと作業をしていた。

僕は『インビジブル』を解いて話しかける。

「ここは教皇以外立ち入り禁止のはずだけど、あなたたちは何をしてるんですか？ それに、そこに横たわっている人はマリオ教皇ですよ？ どういうことですか？」

見たことないけど、この流れならきつと、あそここの人はマリオ教皇だよ？ 多分。で、魔法陣があるから、テンプレ的にはマリオ教皇を生贄にして、邪神か何かを復活させようとしてるって感

じかな。でも、マリオ教皇って死んでるよね……。死んだ人って生贄になるのかな？ 生贄って文字通り、生きてる人を贄につて感じなんじゃ……

「誰だ!？」

黒いローブの男たちは一斉に手を止めて、僕を見た。

まずは対話をして情報を集めるか。多分だけど、邪神復活にはまだ時間がかかるはず……。だよな。聖女も生贄に必要だったり……。あっ！ なるほど。ユーナも生贄に必要だから、枢機卿の投票で地盤を固めたとかかな……

「僕？ 僕はあなたたちを倒しに来たんだ。あなたたちは邪神の信者だろ？」

「どうしてそれを!？」

ビンゴ！ さすが異世界テンプレ。このまま主人公らしく言っちゃうか。きつと主人公補正でなんとかなるはずだ。

「その魔法陣で邪神を復活させようとしてるんだろ？ 全部知ってるよ」

「なるほど……。そこまでわかってるなら、生かして帰すわけにはいかないな」

邪神の信者であろう黒いローブの男たちは、それぞれにナイフを持って構えた。

僕はすぐにその場から姿を消して男たちの後ろに回り、手刀で無力化していく。

四人を無力化すると、残った一人に再び話しかけた。

「おとなしくしてれば殺しはしないよ。どうする？」

「な、何が目的だ!!」

「目的？ う〜ん、邪神の復活は困るから、それを防ぎに来た……かな」

話しながら、一瞬で『転移』して相手の背後に回った。そして手をはたいてナイフを奪い、そのままナイフを男の首元に添えて話を進める。

「じゃあ、ここで何をしていたのか詳しく教えてくれるかな？」

男は観念したのか、詳細を話し始めた。

おおまかには僕が予想していた通りだった。でも肝心のマイがいなのは残念だな。

男の話では、前教皇を弱らせて邪神への生贄にしようと思っていたところ、そのことを知った教皇が自分で毒を飲んで死んだ。そこで死体を供物にして邪神をよみがえらせようとしたが、できなかったため、歴代の教皇の死体を使ってどうにかできないか、ここで研究していたらしい。

それと並行して、現教皇の下に邪神の信者を枢機卿として据え、その後聖女を殺し、新たな聖女を置く予定だったとのことだ。

新たな聖女……それってもしかして、マイを据える予定だった……とか。そしてやはり、カイロンとケイロンは邪神の信者ってことか……

マイは『転移』が使えるようで、枢機卿の投票後に再度現れる予定だったようだ。

これで、ある程度の情報はそろったな。とりあえず、どうしようかな……

教皇しか入れない聖なる塔で、邪神の信者が邪神を呼び出す研究をしていた。この事実で教皇を

失脚させることはできるだろう。

マリオ教皇を『アイテムボックス』に入れて、邪神の信者は五人とも縄で縛って連れていくことにした。

そして聖なる塔には一度入れれば、中から外へは『転移』できることがわかったので、僕は『転移』で銀の祝福亭に戻ったのだった。

☆

「クリフ様!!」

銀の祝福亭に戻ると、セリーヌたちやイマデア枢機卿までそろっていた。

「ただいま」

中に入っただけに、縄で縛っていた信者たちを床に降ろした。

「この方たちは？」

僕は聖なる塔の中であつたことをみんなに話した。

「邪神の復活……」

「うん。これはもうグローヌ教皇も言い逃れできないと思う。教皇が聖なる塔に入ったらマリオ教皇や邪神の信者がいないことがバレるだろうから、急いでユーナを助けに行こうと思うんだ」